

株式会社センリファーム

農業をもっと、オモシロク！

はじめに

平成9年設立の(有)勝目製茶園は茶生産を基盤とした経営を続けていましたが、茶の価格が下がり始めた平成25年に青汁向けの大麦若葉の生産、加工に取組むと同時に、同社の専務取締役である勝目千里氏が、荒茶、煎茶及び大麦若葉等販売を行う(株)千里食品を勝目製茶園から独立する形で設立しました。また、千里食品の新規事業として平成27年からケール、明日葉の栽培・加工にも着手しました。当初、古い茶工場で大麦若葉の乾燥と類似した条件で試作を行ったため、糖度が高く茎の太いケール、明日葉は乾燥に時間を要し、製品の一般生菌数が青汁原料としての衛生管理基準を上回るといふ問題が発生しました。

この問題は、試作を繰り返す中で原材料の細断や高温乾燥でクリアできることを確認できたため、適切な条件で加工できる施設整備の必要性を感じていました。

6次化プランナーによる支援

このような中、平成28年に開催された鹿児島6次産業化サポートセンターの個別相談会をきっかけに自社生産のケール、明日葉を原料とした乾燥品製造を主軸とした総合化事業計画作成とHACCPに対応可能な加工施設整備事業申請を併行して行うこととなりました。これに対応するため、勝目氏は鹿児島6次産業化サポートセンターに支援を要請し、HACCP等衛生管理及び施設設計を中央プランナーが、経営・計画作成を

県プランナーが担当し、平成29年2月に「自らが生産するケール及び明日葉を用いた乾燥加工品の製造販売を行う事業」として計画が認定され、平成31年3月に加工施設竣工、同年5月に稼働開始しました。

おわりに

勝目氏は、令和元年11月に社名を「株式会社センリファーム」に変更。

私たちのビジョンは、

「農業をもっと、オモシロク！」

「信頼↓連携↓新しいチャレンジ」を掲げ、地域農業者・関連事業者との連携や地域農産物活用を基盤とする新たな事業展開を計画しています。

曾於地域の農業及び食品関連産業の発展にセンリファームの新たな取組の貢献が期待されます。

鹿児島6次産業化

サポートセンター

(公社)

鹿児島県農業・農村振興協会内



新加工施設内部



新加工施設外観



勝目千里代表

有限会社レガール・ワキタ

6次産業化で長島町を売り込め

はじめに

有限会社レガール・ワキタは、長島町蔵之元で水道工事業を主務とする会社です。「レガール」とはイタリア語でつながりという意味です。6次産業参入のきっかけは、代表取締役の妻 脇田恵子氏が、義父の農業を引き継ぎ、「ばれいしょ」の栽培を始め、平成19年に町の農業委員に就任したことです。各種研修への



長島赤土ばれいしょ

参加を通じて、農業の可能性を強く感じ、長島町内で収穫される「ばれいしょ」や「さつまいも」等を広く販売するための商品づくりへの意欲を高めてゆきました。

当初は、「蒸しいも」の加工に取り組みましたが、より付加価値を高めた菓子づくり挑戦し、今では、地元素材を活かした、じゃがいもパイ、ポテトチップス、焼き芋を製造・販売しています。また、マスコットキャラクター、POTE・ANGELS もつくり商品販売に活用しています。他にも長島町特産の「島みか



ん」を使ったサイダー、アイスクリームなど多くの商品開発を手がけ、平成30年には「島ミカンサイダーの開発と販売」で総合化事業計画の認定も受けました。



島ミカンサイダー

コロナウイルスによる転機

これから新商品の販売に注力しようとした矢先、コロナウイルス蔓延という災禍に見舞われました。令和2年3月以降、長島を訪問する観光客の減少に伴い加工品の売上げも大幅にダウンしました。

時を同じくして、国の6次産業化支援が、事業者の経営改善を主眼とするものに一新されました。これを受けて、脇田恵子

氏も経営改善計画作成に積極的に取り組み、今後5年間の目標を設定し、実施計画を作成しました。これを基に、商品設計の見直し、不採算商品の把握や新商品導入の可能性検討等を行いながら、新たな販売戦略として新規ホームページでの販売活動の展開を目指しています。

おわりに

これまでは、原価計算や商品の採算性等にとらわれず、長島町農産物の知名度向上のために突き進んでいましたが、コロナ禍が逆に幸いし、事業内容を見直し再スタートが切れるようになりつつあるようです。

それでも、脇田恵子氏の頭の中には新たな商品開発構想が渦巻いているようで、まだまだ、「あいも こいもな日々」が続くようです。



鹿児島6次産業化サポートセンター

(鹿児島県農業・農村振興協体内)

有機JAS認証 さわだ農園 工房「はる菜」

消費者に安心・安全を届けたい

はじめに

澤田農園は出水市で先祖代々米を生産しており、昭和55年頃から農薬・化学肥料を一切使わない生産に移行し、平成15年に有機JAS米の認証を受けた。この間、平成12年、夫の他界という不幸に見舞われたが、澤田たみ子氏とUターン就農した息子の泰之氏が経営を継承、栽培面積も拡大し、現在は13ヘクタールで有機米を生産、販売している。また、たみ子氏と泰之氏の妻 絃子氏は女性農業経営士に、泰之氏は平成29年度に指導農業士に認定され、それぞれ経営に従事しながら地域の担い手育成・支援活動も行っている。

一方、たみ子氏は農業生産に携わりながら地元の農産加工グループ「わらび郷」で加工技術を習得、その後女性起業活動として平成28年2月に自宅敷地内に加工施設を新設（平成29年有機JAS認証）し孫娘の名にちなんで工房「はる菜」と命名、生産した有機米・農産物の付加価値を向上すべく加工事業に着手し、絃子氏と娘の南鶴聡美氏とともに米加工品等を製造・販売している。しかし、農業生産との掛け持ちのため製造に割ける期間が農閑期に限られるという課題を抱えており、より棚持ちの長い商品開発の必要があった。

新たな挑戦

そこで、6次産業化中央サポートセンターのプランナーを活用し、新規加工品の製造法や既存加工品の棚持ち延長などの手法を習得した。これと併行して北薩地域振興局等からの勧めも



澤田たみ子氏、絃子氏、南鶴聡美氏

あり、有機米を原料とした新規加工品の製造販売を核とした6次産業化総合化事業計画を申請、令和2年3月に計画が認定されている。

計画認定後は6次産業化支援方策の変更に伴い、経営全体の付加価値の向上を目指しながら新たな加工品開発を進めている。これらの努力が認められ、令和2年度末には農山漁村女性活躍表彰、女性地域社会参画

部門（個人の部）の農林水産大臣賞も受賞したところである。また、販売商品は数少ない有機JAS加工品として消費者に好評を博している。

令和2年4月に農林水産省から新たな有機農業推進に関する基本方針に10年後の取組面積等、具体的目標が示されるなど有機農業生産は拡大の方向へ進んでいる。この中で、「さわだ農園」は安心・安全な農産物、加工品を消費者へ届けるべく家族全員で努力を続けている。



有機JAS認証
あくまき（日本初）

鹿児島6次産業化サポートセンター
（鹿児島県農業・農村振興協会内）

株式会社知覧心茶堂

ギヤバ紅茶 迷いから確信へ

はじめに

(株) 知覧心茶堂は、知覧町の茶農家三代目の東垂水良世氏が平成20年8月6日に設立、新たな加工法による紅茶製造・販売で平成24年6次産業化総合化事業計画の認定を受けています。その後、平成26年に専用加工施設を建設し、「知覧産」「無農薬」「紅茶に適した品種」にこだわったオリジナル紅茶ブランド「ハートペコー」(ハートは心、ペコーは紅茶の英名)を立ち上げました。また、平成30年には紅茶で日本初のグローバルギャップも取得しています。これに加え、茶の機能性にも着目し、睡眠導入やリラククス効果、血圧降下作用等の機能があると言

われるギヤバの増強法(農研機構が開発)を簡易化したギヤバ紅茶製造法確立に成功、併せて、茶の品種特性を生かしたテアニン、ケルセチン等の機能性成分豊富な新商品開発も行っています。

発酵ギヤバティーは、お茶に含まれるアミノ酸を、特殊製法でギヤバ(γアミノ酪酸)に変化させて作った完全発酵茶です。ギヤバは神経にも広く存在する。実効性、効果のほどで効果を認めたり、リラックスをもたらしたりする役割を果たしています。

ギヤバ茶の製法

- 1. 茶葉に湯を当てて酵素呼吸を促します
- 2. 真空状態にする事で酵素のグルタミン酸がギヤバに変化します
- 3. 茶500mlにティーパック1つの分量はならかわいん入れめ
- 4. 好気性嫌気性くりかしたお茶と実効性を、発酵、乾燥させます

ギヤバ紅茶リーフレット

す。一方、営業面では、商業施設での催事等を中心とした販売が、相次ぐ老舗百貨店などの閉

店により陰りが見え始めました。特に緑茶の価格低迷や販売不振が経営に大きく影響を与えたため、専門家への相談や商談会への出席等も積極的に行いました。が売上げ拡大につながる機会には恵まれませんでした。また、生産、加工、販売の全てを一人で行っており、様々な面での迷いもあったようです。

プランナー支援による転機

このような中、昨年、県6次産業化サポートセンター等からの勧めで、エグゼクティブプランナー支援を受けました。商談会支援等を含め延べ八ヶ月間で、知覧心茶堂の生産から販売に至る内部、外部環境分析結果をも



ギヤバ紅茶

とに5年間の販売品目別の経営戦略及び行動計画をつくりました。

現状分析の過程で、ギヤバ含有を謳った食品の販売が増え、市場規模も拡大していることなど、ギヤバが食品業界のトレンドであることを確認することができました。また、東垂水氏自身も、商談相手の反応などからギヤバをキーワードとする、自社生産の紅茶は売れる確信するとともに販売拡大への意欲が高まりました。

おわりに

東垂水氏は、知覧町にある30の製茶工場でギヤバ茶を大量生産できる体制をつくりたいという構想を持っています。

現在、その構想を実現するべく自社の経営安定を目指し、生産、販売に邁進中です。

鹿児島6次産業化

サポートセンター

(公社)

鹿児島県農業・農村振興協会内